

# 家政事情からみる『シンベリン』

大阪芸術大学 文芸学科 教授 団野恵美子

16世紀から17世紀にかけて、約150年もの間、イギリスでは女性向けの日常生活の手引書、女性の地位に関する論説や説教集、礼儀作法書が出版されてきた。父権制社会における女性の立場や結婚について、家庭生活手引書などの影響があることは、エリザベス朝演劇の端々に明白である。

シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)の『シンベリン』(*Cymbeline*, 1609-1610)では、ブリテンの王女イノーゼンが父王に逆らい結婚し、追放された夫がローマの知人宅で妻の貞節を賭け事を使ったため、妻の寝室の描写報告と腕輪を証拠に不義を疑われる。彼女は父の逆鱗に触れ、継母には『白雪姫』のように命を狙われ、愚鈍な義兄から結婚を迫られ逃げ場を失う。美貌と才知に恵まれたヒロインが才覚を発揮して目的達成する、というお伽噺にお馴染みの筋立てを使いながらも、愚直なまでに奸計にかかる夫や父との和解の結末には皮肉な現実感が伴う喜劇である。

## 1. 劇の概要と特徴

王シンベリンに逆らい貧乏貴族ポスチュマスと結婚したイノーゼンは、ローマへ逃げた夫を想いながら、策略家の継母を警戒し、愚鈍な義兄の求愛を退ける日々を送る。夫にはダイヤモンドの指輪を渡し、代わりに腕輪を貰うが、この愛の記念品が後に賭けの対象と偽りの証拠品となる。

ローマで女性不信論者ヤーキモーと夫が論争になり、イノーゼンの貞操が試されることになった。ブリテンにきたヤーキモーは誘惑に失敗したものの、彼女の寝室装飾や身体的特徴を書きとめ、腕輪を盗み、ポスチュマスに妻の不貞を信じ込ませた。ポスチュマスは妻の殺害を家来に命じるが、イノーゼンに忠実な家来はウェールズへ男装して向かうことを勧める。道中の洞窟で歓待されたのは実の兄二人と育ての親だったが、互いに気付かないまま彼女は継母からの薬を飲み仮死状態に陥る。同時にイノーゼンを追跡してきた義兄が殺害され、首無し死体となってイノーゼンの隣に寝かされた。覚醒したイノーゼンは義兄の服装から夫が死んだと勘違いしたまま、ローマ将軍の小姓に抱えられる。

シンベリンがローマ皇帝への貢物を拒絶したことで、ローマ軍がブリテンに兵を進め戦が始まる。ブリテンが勝利し、イノーゼンの兄二人、育ての親は手柄を立てるが、ローマ側のポスチュマス、イノーゼン、ヤーキモーは捕虜となり王の前に引き出される。この審問がイノーゼンにとっては夫婦、親子、兄弟の再会の場となり、シンベリンには家来との和解を迎えさせ、最終幕のブリテンとローマの和平へ繋がる。

不条理な筋立ては伝統的なロマンスの世界とも理解されるが、誠実な愛のために邪悪な人間と戦う冒険物語である。虚飾に満ちた宮廷と素朴な田舎が対比され、『お気に召すまま』のアーデンの森や『オセロー』

の嫉妬も融合している。他作品の悲劇、喜劇の登場人物の要素を台詞に見ることができる。

## 2. 諷刺と家政事情

イノーゼンの不貞の復讐として、ポスチュマスは女性の悪口を書いてやると誓う。女性への諷刺は母親にも及び、自分自身も「誰かの道具で造られた偽金」だと貨幣の譬えで自虐を述べる。

虚飾と陰謀にみちた宮廷を、山中で王子を養育しながら山中で暮らすベラリアスは、「代金未払いの絹地より誇らしい」「帳簿の借金は消されないまま」と豪華な暮らしが見掛け倒しだと、家政で必須の会計簿の比喩を用いる。宮廷の手練手管は、「都会の金貸し」の汚い手口だと王子たちに教えている。

ポスチュマスも牢獄で妻への後悔の念から死を望み、生きながらえることは厳しい返済方法であると、罪の償いを「破産した者から債務の三分の一、六分の一、十分の一と取り立て額を徐々に減らす」債権者に譬えている。牢番でさえ、ポスチュマスを慰めるのに、「死んだら居酒屋の支払いに怯えなくてすむ」「絞首刑の縄は間違いのない会計係」と死刑を飲み屋の勘定に譬えて話す。芝居の台詞に日常生活品や貨幣経済が反映されている。

## 3. 日常生活の知恵と笑い

宮廷の紳士は、「布を広げて見せるよりぎゅっと丸めて過小評価している」と日常生活で布地を扱うように、ポスチュマスの風采と人柄を誉める。

愚鈍な義兄でさえ、楽師を率いて愛のセレナーデを奏するとき、「馬の尻尾の毛、子牛の腸、玉無し男の声を使っても効き目がない」ときはイノーゼンの耳が悪いのだ、と楽器名ではなく楽器の素材を侮蔑的な表現で挙げる。

その義兄に恋愛技術を仕込む継母は、礼儀正しさ、拒絶されても誠心誠意仕えること、と理に適った助言だけでなく、「近寄るなど言われても聞こえないふりをして無意識で」と強引さを見せるが、息子は「無意識」を「分別がない愚かさ」と受取り、強欲な母と愚鈍な息子という喜劇の構図を作り出す。

夫から不義を疑われたイノーゼンは、ふしだらなイタリア女が夫を誑かしたせいだといい、不埒なイタリア女は「白粉から生まれた女」と化粧する女性の悪口をはさみ、自分自身は古惚けた流行遅れの服だと譬える。古くても生地がよく壁に吊っておくには惜しいから、縫い目をほどいて切り刻むのだと、心の痛みを仕立て直される服で表す。

日常生活の中での家庭用品や暮らしの知恵を会話に取り入れることで、諷刺的な面白さや登場人物の才知や時代の共通認識をも見て取れる。